

第10分科会

教養教育としての自校教育

～「建学の精神・理念」の具現化にまつわる課題と展望～

報告者

大川 一毅（岩手大学 評価室 教授）

葛城 浩一（香川大学 大学教育基盤センター 准教授）

小崎 眞（同志社女子大学 宗教部長／生活科学部 教授）

コーディネーター

林 雅清（京都文教大学 臨床心理学部 専任講師）

参加人数

38名

高等教育の質保証が問われる昨今、「自校教育」の関連科目においても当然厳格な成績評価基準が求められる。自校教育科目における「評価」とは何なのか。また、どうすればそれが大学の理念や「建学の精神」の具現化に結び付くのか。私立大学のみならず国公立大学においても重視されつつある自校教育について、その位置付けや具現化の実例などを紹介し、現代社会における自校教育の意義・課題・展望について広く意見交換を行いたい。

〈第 10 分科会〉

教養教育としての自校教育 ～「建学の精神・理念」の具現化にまつわる課題と展望～

○分科会のねらい

本分科会では、大学・短期大学における、自校の歴史や建学の精神・理念等の教授を主眼とする「自校教育」について、その必要性から評価基準に至るまで幅広く議論し、教養教育ないし課外教育における「自校教育」の意義や課題を再確認することを目的とした。

特に、教養教育の正課科目に入れられた自校教育科目に関しては、当然のことながら具体的な到達目標の設定や厳格な成績評価基準が求められる。しかし、例えば情操教育を目的とした自校教育科目においては、「厳格な評価」が困難な場合もある。また、いかにすればそれが大学の理念や建学の精神の具現化に結び付くかという点についても、自校教育を取り入れている各大学における課題の一つとも考えられる。

私立大学のみならず、国立・公立大学においても次第に導入されつつある自校教育に関して、上記の観点からその位置付けや具現化の実例、成功例などを紹介し、現代社会における自校教育の意義や課題、そして今後の展望について、広く意見交換を行うこととした。

○報告の概要

午前の部では、大学教育における自校教育の現状と、具体的な自校教育の実施例について、3名の報告を行った。

まず、第1発表として、岩手大学の大川一毅氏より、「自校教育授業の目的と成果～授業実践を振り返って～」と題する報告を得た。大川氏はかつて全国の大学における自校教育の現状に関する調査・研究をされていたことから、最初に基調報告のような形で自校教育の定義・概略・現状について説明いただき、その後、岩手大学の担当科目「大学の歴史と現在」における教育内容、学生の反応、そして成績評価の実際に関して報告いただいた。

次に、第2発表として、香川大学の葛城浩一氏より、「「香川大学検定」を通じた自校教育へのアプローチ」と題して、香川大学で実施されている「香川大学検定」というユニークな取り組みに関する報告を得た。また、次年度から必修科目に自校教育が盛り込まれることが決定されたことや、新任教員のFD研修事例についても紹介いただいた。

最後に、第3発表として、同志社女子大学の小崎眞氏より、宗教系私立大学の事例として「建学の精神・理念の具現化にまつわる課題と展望～自校教育の可能性への模索：同志社女子大学の事例を通し～」と題する報告を得た。同志社女子大学ではキリスト教（主義）教育を実践していることから、正課科目のほか礼拝やワークキャンプ等において一貫して自校教育・キリスト教教育に力を入れられていることがわかった。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

午後の部では、質問用紙によって午前の部の参加者38名（午後の部の参加者は32名）のうち11名から質問を得たことから、まず質疑応答を中心に各報告者およびコーディネーターより補足説明を行った。

質問内容は、主に自校教育の①担当者発掘の問題、②教職協同の問題、③成績評価の問題に関するものが多く、それぞれの大学（岩手大学・香川大学・同志社女子大学・京都文教大学および京都文教短期大学）における実践例について回答した。①について





は、宗教系私立学校を除けばどこも困難であり、一部の教員の負担になることが多く、担当者が辞めてしまうと自校教育も縮小されることがあるとの回答が多かった。そのような中、香川大学の「大学検定」の事例は、担当者が替わっても維持できる自校教育の実例として再確認された。②については、教員よりも職員のほうが相対的に自校愛が強いため、自校教育に職員の協力を得られるシステムを構築するのがよいとの意見が出された。③については、他科目との兼ね合いから甘い評価をつけることの難点も挙げられたが、自校教育の目的は当該大学の学生とし

での自覚を強く持つてもらうことにあり、成績はあくまで二次的な事柄であるため厳しくできない（する必要がない）との意見も出された。

続いて、報告者の葛城氏のファシリテートによってグループディスカッションを行い、大学・短期大学における自校教育の必要性と、自校教育における評価の問題について、参加者同士意見交換してもらった。質疑応答に時間を費やした結果、ディスカッションの時間が足りない状況になったが、全体的に自校教育は必要であるとの意見で一致し、また活発な意見交換がなされたことで、本分科会の開催目的は達成されたものと思われる。

本分科会を契機に、各大学における自校教育が充実することによって、大学の教養教育の幅が広がり、ひいては学生の大学への帰属意識が高まり退学率の低下にも繋がることを期待したい。

コーディネーター 林 雅清（京都文教大学）

自校教育授業の目的と成果 —授業実践を振り返って— (自学を学んで知ることの驚き・喜び・誇り・疑問)

岩手大学 評価室 教授 大川 一毅

はじめに

(1) 自校教育のとらえ方

本報告にあたって、自校教育を「大学の理念、目的、沿革、組織・制度、人物、教育・研究の現況、など自校（自学）に関わる特性・歴史・現状・課題等を教育内容・題材として実施する一連の教育・学修活動」と大枠で定めておく。こうした自校教育を実施する大学が増えている。ただし、自校教育の実施目的、内容、方法、授業形態は多様である。それぞれの大学にそれぞれの自校教育がある。「絶対的」な自校教育は存在しない。

(2) 自校教育をやってみて「意外なこと」

自校教育授業を担当し、あるいは他大学訪問調査からわかった「意外なこと」がある。たとえば学生は「理系学生の履修者が多く、しかも熱心」、「自分の大学の歴史や取り組みはよく知らない。関心も無かった」、「他大学のことは知らない。受験もしていない」、「日本史は習っていない。よく知らない（でも嫌いではない）」、「高校（母校）の歴史も知らない。教わったこともない（この授業で初めて知る母校校章や校歌歌詞の意味。旧制中学のいわれ）」、「大学への愛着は小学校へのそれに近い（高校への愛着が強い）」、「卒業生に会ったことがない（定かではない）」などである。

自校教育に関わる「意外なこと」を意外なままにせず、むしろそれを前提にして、各大学それぞれの事情や教育の考えに則し、独自の自校教育授業を創造することが肝要である。

1 自校教育普及の背景

(1) 不本意入学者の増加

自校教育が普及していった背景の1つに「不本意入学者の増加」がある。「大学全入化」の進行や、家庭からの要請もあって「入りたい大学よりも入れる大学」への進路指導・進学動向が進んだ。それにともない「大学が好きになれない」、「大学で何をしたいかわからない」、「学修意欲がわからない」、「大学に居場所が見いだせない」、「将来の希望が持てない」といった学生も増加した。そこで自校教育に着目する大学が出てきた。自校教育授業を「自分の入った大学はどのような大学なのか」、「ここで何ができ、どんな可能性があるのか」、「そのために何をしたらよいのか」など、大学を知り、自分が大学とどう関わっていくかを意識させる契機と位置づけて、それぞれに展開していった。

(2) 「大学力」強化に向けた「全学一体化」

少子化にもかかわらず大学数は増加し、大学間競争は激しい。志願者・進学者をはじめ保護者や雇用先など、ステークホルダーは大学に成果を要求するようになった。こうした状況にあって、各大学は「大学力」の強化を図るべく「全学一体化」を進めた。ここでも

自校教育が着目された。学生のみならず、教職員、卒業生等が自校教育に参画することで構成員それぞれが大学の現状を知り、将来を考え、自分にできることは何かを模索する。これによって所属意識も高まる。こうした契機を提供するものとしての期待があった。

(3) カリキュラムの自由化、教育内容・方法の多様化

大学教育の内容・方法の変化も自校教育の普及を促進した。大学設置基準の大綱化(1991)以降、カリキュラムの自由化が進み、テーマ別科目や学際科目など新しい授業科目が登場した。これら授業では問題解決型や学生参画型等の授業形態も多い。こうした中で、全学生の共通題材である「大学」を取り扱い、多様な教育・学修内容や方法を設定でき、教職員や卒業生、地域市民も巻き込んで参画できる授業として自校教育が普及していった。

(4) 大学周年事業の継承

大学周年事業を継承した自校教育授業の開講も多い。新制大学制度の発足(1948)、新制国立大学の発足(1949)から50年経った1998年から2010年代に、大学の周年事業が盛んになった。そこでは各種式典をはじめ、学部新設や新キャンパス事業などの他、全学同窓会の組織化や年史編纂、大学アーカイブスの設置も行われた。この年史編纂事業で収集した資料や刊行書籍、作業を担った人材を活用すべく、自校(史)教育も行われるようになった。

2 岩手大学で実践している自校教育

(1) 授業の目的と内容

報告者(大川)は、勤務する岩手大学で「大学の歴史と現在」という自校教育授業を担当している。これは半期15回の教養科目(選択科目)であり、同一内容で前期2コマ(「1年生クラス:68名」と「2年生クラス:98名」)、後期1コマ(「2年生クラス:62名」)を開講している。

シラバスには「授業目的」をこう掲載した。

「大学」という組織やその制度の歴史の変遷を学ぶことを通し、自分たちの所属する「岩手大学」及び自分たちの「大学での学び」を客観的に捉え、当事者の一人として今後の進むべき道を考えることを目的としています。

「到達目標」には次の3点を掲げた。

- ・日本の「大学」の誕生時から現在までの歴史的流れについて語るができる。
- ・岩手大学の学生として自学への理解を深め、第三者に岩手大学の特性を語るができる。
- ・岩手大学で自分が何を学び行動したいのかを考え、その内容を他者に伝えることができる。

「授業の概要」は以下の様に記載した。

大学はどこも同じではありません。どの大学にも歴史があり、ドラマがあります。それぞれの時代状況の中で、大学は自らの使命(ミッション)を掲げて創立し、その実現に向けて多くの人々が力を合わせて発展させてきました。岩手大学も例外ではあ

りません。ならば私たちの岩手大学にはどのようなドラマがあるのでしょうか。(中略)

日本の大学の歩みの中で、岩手大学は何を期待され、どう応え、そして今、いかなる可能性に向かって歩みを進めているのか。高校の進路指導では伝えてくれなかった「岩手大学 PRIDE (プライド)」を歴史の中から理解していきます。

授業計画の後半では、岩手大学の職員スタッフを講師として「岩手大学の現在とこれから」についてお話しいただきます。職員さんは岩大出身者も多く、皆さんの最も身近な先輩です。日々の仕事をふまえた「岩手大学のスペシャリスト」としてのお話から、大学の多様な側面が見えてくるでしょう。

我等が学長先生もご登壇くださいます。ご期待下さい。

(2) 授業計画と担当者

①「大学の歴史」パート

本授業は全 15 回構成の講義形式授業である。授業計画では、初回から 10 回までを「大学の歴史」パートとして、日本における大学の歴史を授業主担当者である大川が講義する。この大学史講義に織り込んで、岩手大学に連なる前身校（岩手師範学校、盛岡高等農林学校、盛岡高等工業学校）それぞれについて、いかなる時代背景のもと、どのような使命を託されて設置されたのか、そこでの教育内容や卒業後の進路はどうだったのかを説明する。学生を取り巻く社会生活環境や学生文化にも言及する。履修学生達は、これら講義から、今日に繋がる大学の系譜、学園風土、キャンパスや学生寮・大学校舎の歴史的意味、地域との関わり、学生達の矜持、社会からの期待、などを自覚的実感的に理解していく。

授業外学習として、各授業回後に「今日の授業からあなたの『トピック』を見いだし、そのことについて自由に考え、調べ、それを i カードで報告してください (200~400 字)」という課題を提示する。授業回を重ねるにつれ、学生は授業の中に興味あることを主体的に見出すようになり、そこから設定した課題について文献調査や実地検分、時には当時を

回数	授業テーマ	担当者
1	「国家近代化と大学」	大川
2	「帝国大学と専門学校」	〃
3	「盛岡高等農林学校の設立」	〃
4	「大正・昭和前期の高等教育」	〃
5	「戦争と大学」、「盛岡高等工業学校の設立」	〃
6	「新制大学の発足 (岩手大学の建学をめぐるドラマ)」	〃
7	「高度経済成長と大学の量的拡大」	〃
8	「学生紛争の嵐と大学改革」(人文社会科学部の設置)	〃
9	「1970~1990年代の日本の大学」	〃
10	「21世紀を迎えた大学」(国立大学の法人化)	〃
11	「グローバル化の実態と岩手大学の国際化戦略」	国際課職員
12	「岩手大学のキャリア支援」	キャリア支援課課長
13	「岩手大学の地域貢献活動とCOC」	地域連携センター教員
14	学長講話「岩手大学の目指す姿」	学長
15	「大学職員という仕事」	人事課職員&新入職員

知る家族や知人へのインタビューなどに取り組み、その結果を文章にまとめ、次週までに報告する（webを使用したレスポンスシステムで「iカード」と呼ぶ）。次回授業の冒頭では、学生から提出された様々な論点や内容の報告（レスポンス）を披露することも多い。

②「大学の現在」パート

授業後半の第11回からは「大学の現在」パートとして、岩手大学の各部署で業務を担う職員や教員に登壇願う。登壇者への依頼は数ヶ月前から打診する。授業計画には、岩手大学の運営重要事項と位置づけられる「地域貢献」と「グローバル化」に関する内容は必ず組み込む。平成28年度の授業では、キャリア支援課、国際課、地域連携・COC事業推進室、さらに大学全体の組織体制や職務を包括的に解説できる人事課の職員に登壇してもらった（年度によっては総務課の場合もある）。人事課職員の担当回授業（2年生クラス）では、大学職員という仕事や、その採用・研修システムについても語っていただいた。将来の就職が気になり始めた2年生にとって興味をひく内容だったようだ。

③ 新任職員の授業参加

初任者研修の一環として、岩手大学の新入職員も1年生クラスの授業を聴講している。授業の最終回は、新入職員に「大学職員という仕事」というテーマでの授業企画・担当を依頼している。平成28年度は新入職員5名全員が岩手大学卒業生だったことも含め、本題の他に、学生時代のこと、就職活動のこと、1年生に期待する大学での学びや生活などを語ってくれた。今回授業を担当した新入職員達は、2ヶ月前から自主的に集合して授業案を練っていた。結果としてこの授業企画・担当も初任者研修となり、授業当日は人事課の職員研修担当者も参観した。自校教育は、教員のみならず、職員、卒業生、地域市民など、様々な人材の参画が可能である。教員も複数体制で共同担当することが多い。ただし、学内外参画者が多くなれば、人選や日程調整、授業計画の立案など、対応課題も増える。授業担当者の派遣に難色を示す学内部署や上司が存在するのも実際である。

授業を担当してくれた新入職員さん達には、後日、担当授業に対する学生からのレスポンスカード、並びに大学コンソーシアム京都FDフォーラムのこの分科会資料（当日使用したパワーポイント資料）を提供した。これに対し、以下の返事を寄せてくれた。

レスポンスカード、自校教育に関する分科会の報告資料、どちらもありがとうございます。読んでみると学生さんに個別に答えたいことがあったり、色々と考えさせられたりしております。4月に職員として採用されてから9ヶ月しか経っていませんが、もう初心を忘れていることに気づかされました。時々振り返らないといけないと改めて思います。また、学生の時に「大学の歴史と現在」を受講していたにも関わらず、もう一度、学生として今の「大学の歴史と現在」を受講したくなりました。学生のみなさんのレスポンスカードに感動したこと、今回いただいた分科会資料で自校教育の意義がわかったことがその理由です。いただいたレスポンスカードは今後も時間のあるときに読み返したいと思っております。自分の中だけに収めておけなかったので、メールさせていただきました。お忙しいところすみません(^);

3 自校教育授業の成果

(1) 学生からのレスポンスカード

こうした自校教育授業によって、学生はどのような感想や自覚を持ったのか。まず第3回授業「盛岡高等農林学校の設立」に対する授業後レスポンスカードの記載を紹介しよう。自学の歴史を知ることで得た驚き、喜び、誇り、自覚について素直に記載している。

私は岩手大学が第一志望ではなく、あまり誇りを持てなかったが、このように大学の歴史を知ることで誇りを持てるようになり、知り合いなどに聞かれたら自信をもって岩手大学について語りたと思った。(1年生)

岩手大学の前身、盛岡高等農林学校の設立の背景には、大変驚かされました。当時の東北地方の大凶作問題の克服および復興、東北地域の発展・開発、というような、重大な使命をもって設立された盛岡高等農林学校。当時の学生は地域の希望であり、誇りであり、地域の発展に貢献する人材として期待されていました。そして現在、岩大生はおそらくそのような自覚は持っていないと思います。これからは、岩大生として責任と自覚をもって発言、行動していこうと思います。(2年生)

第6回授業「新制大学の発足（岩手大学の建学をめぐるドラマ）」は、今日の岩手大学に繋がる新制大学発足期の動向を内容とする。これには次のような感想が提示された。

大学設置の際に市民がお金を出し合った岩手大学は「地域の希望の星」だったという授業での話は嘘ではないのだと感じた。岩手大学に来て良かったと思った。(1年生)

自分が通っている大学が地域と深く根づいていて、たくさんの交流をしてきたと知って、とても誇らしい気持ちになった。(2年生)

(2) 授業アンケートでの感想

全授業回終了後の「授業アンケート」にも学生からの感想が提示されている。授業の到達目標に照らせば、成果検証にもなる。いくつか抜粋してみよう。

(1年生)

- ・大学の歴史だけでなく、現代の大学が抱える問題を考えられるようになった。
- ・授業、カード、レポートなど自ら考える機会が多くあり、非常にためになった。
- ・岩手大学をはじめ、偏差値だけでは分からない大学のよさを知ることが出来た。
- ・自分が入学した岩手大学をよく知ることが出来た。
- ・先生の話が分かりやすく面白かった。全部出席すればよかった。
- ・一年生のうちに、岩手大学の歴史を知ることが出来た。
- ・自分の大学の歴史を学び、愛着が持てた。
- ・学びと発見と驚きの連続だった。
- ・自分の大学に誇りを持つことが出来た。
- ・職員の方のお話しが面白かった。大学を支えていただいていることがよく分かった。

- ・学長先生はお金が好きだった(スミマセン。私達のためにお金で苦勞されているのですね)。
- ・大学が地域や環境のために行っている様々な取組に感動しました。
- ・大学時代の過ごし方が分かってきた。将来を考えるようになった。

(2年生)

- ・学長先生と話す機会はとても貴重でした。
- ・底辺の大学だと思っていたから、誇りを持てるきっかけを得て嬉しかった。
- ・自分の現状を把握し、課題を見つけることが出来た。
- ・岩手大学について、人に話をする事が出来るようになった(誇りと愛着をもって)。
- ・自分の大学の歴史を知る事なんて、ありそうでない。いい授業だった。
- ・大学職員の方々のお話は貴重だった。大学職員という仕事に関心を持った。
- ・文章力が上がった。
- ・将来について考える機会になった。
- ・岩手大学の歴史から、私たちに求められている期待が分かってきた。
- ・大学の歴史を学ぶのは面白い。

これらのように、アンケートからは「自学の歴史を知ることで、大学への誇りを持つことができた」、「大学で何ができるのか、何をすべきか、という指針が見えてきた」などのコメントを多くみる。全国で実践されている自校教育授業を見聞しても、そこでは安直な大学礼賛や自虐的な大学批判は意識的に避けている。むしろ大学の様々な課題を学生に提示して将来のあり方をともに考えていこうとする姿勢を示す。「学生諸君は大学の重要な構成員(あるいは主人公)であり、諸君の力によって大学は作られていく」というメッセージに、学生は建設的に反応する。本授業においても、最終課題「岩手大学への提言」にあつて、学生達は大学を取り巻く現状を客観的に分析しながら岩手大学のめざす方向性をホームページや広報誌、学長講話の内容などから確認し、これをふまえて学生の視点やアイデアを反映させた建設的提言を提出した。本授業で到達した学修成果である。

(3) 自校教育授業への懐疑

しかし自校教育授業に全ての学生が肯定的ではない。「自学を知ることにとりだだけの意味があるのか」、「そもそもこの大学は行きたい大学ではなかった。そのような大学の精神などに染まりたくないし、大学の歴史も知りたくない」。こうした意見もある。自校教育実施上の重い課題である。とはいえ、学生からのこうした懐疑に自校教育授業が直接応えなくてもいいのでは、という考え方もある。そうした思いがあるにせよ、学生はこの大学で学び、将来に備えなければならない。学生の懐疑や問題意識は、キャリア支援教育にバトンタッチして継続的有機的に指導するのも一案である。

結びとして

学生は、大学との関わりが濃密であればあるほど、あるいはキャンパスで過ごす時間が長いほど、大学への帰属意識や愛校心を強く持つようになると言われる。自校教育そのものが学生の大学満足度や愛校心を高める特効薬・万能薬ではない。しかし、自校教育が学生の大学参加意欲を促す契機にはなる。たとえば自校教育が、学生の主体的・能動的学修、大学行事・企画への参加、課外活動・社会貢献活動の参加、自分の将来づくり(キャリア形成)に意識的参画、などへの「関心、意欲、行動」を導いているか。これが重要である。これらは自校教育の成果指標ともなる。

「香川大学検定」を通じた自校教育へのアプローチ

香川大学 大学教育基盤センター 准教授 葛城 浩一

香川大学
大学教育基盤センター

「香川大学検定」を通じた
自校教育へのアプローチ

葛城浩一(香川大学)

香川大学
大学教育基盤センター

1. 「香川大学検定」とは

- ・香川大学に関する問題を通して香川大学のことをより深く理解してもらい、それによって香川大学のことをもっと好きになってもらいたいという想いから誕生した自校教育のツール
- ・学生支援サークルの学生が作成
- ・全国的にも非常に稀有な取組



香川大学
大学教育基盤センター



香川大学
大学教育基盤センター

特色生かした 取り組み次々

岩手大の六川一毅准教授の調べで、二〇〇八年時点で自校教育授業を行っていた大学は全国で百三十六校。現在はさらに増えているとみられる。

香川大は、学生有志に大学に関するクイズ形式の冊子「香川大学検定」を写真を使って新生全員に配布。冊子を元にした教材

で授業をする葛城浩一准教授は「歴史を教々と話すだけでは学生の興味を引けない。検定冊子は仕掛けとして効果的」と話す。

「広島大は「広島大学の歴史」などの授業で原爆投下が大学に与えた影響を教える。中国地方の中心的な大学としての歴史に加え、平和を希求する精神も学んでもらう。履修者は多い」と述べる。

早稲田大が同窓会の支援を受けて〇五年から開講する「早稲田を知る」は、六大学野球の早稲田の優勝を組み合わせで学生に人気という。

香川大学
大学教育基盤センター

2. 着想に至る経緯

2007年
自校教育の必要性について考えさせられる出来事問題はどうか?

香川大学
大学教育基盤センター



問19: 教育学部キャンパスの東北の隅には通門がありますが、それはなぜ一度ふさがれたことがあります。それは何故でしょうか?

A. 学生が飛び出して危ないため
B. 鬼門にあたる方向にあるため
C. 不審者の侵入を防ぐため

答19: B. 鬼門にあたる方向にあるため
鬼門とは、陰陽道で鬼が入りするとされる不吉な方向(東北)のことです。1970年代申請に、不幸な出来事が相次いだ経済学部では、東北の隅にあった門を閉じるようになり、教育学部もそれに合わせて閉じることにしました。当時、教育学部の周囲に設置されていたのは土塀でしたが、後にコンクリート塀を設置した際、東北の隅に門はありませんでした。現在ある通門は、学生が車を乗り越えることが多く、地域住民からも批判の声があがったを受け、1990年代申請に設けられたものです。

3. 完成に至るまで



2008年

教養ゼミナール「香川大学検定をつくる！」を実施
 →作成過程を通じて、香川大学への理解が深まり、
 愛校心や帰属意識が高まることを期待



<p>A1. B 本学ではアンケートや授業など様々な場から、香川大学検定は必要としている回答が得られますが、現時点では香川大学がある場所がほとんど決まっています。その際、最も中心であった場合は高松駅か丸亀駅が中心と決まっています。検定特別には高松駅か丸亀駅が中心と決まっています。香川大学が丸亀駅か高松駅が中心と決まっています。</p> <p>Q2. 香川大学が検定された場合、どの学部で検定されたかという点、それはどの学部が検定されたかという点です。</p> <p>A. 経済学部と法学部 B. 教育学部と理学部 C. 経済学部と教育学部</p>	<p>A2. C 香川大学は昭和34年に創設である香川国際短期大学（香川短期）と香川短期大学（香川短期）が合併して設立されました。その中心は香川短期大学（香川短期）が中心で、短期大学より短期大学になりました。香川短期大学は現在まで短期大学として運営されています。その短期大学に比べて、香川短期大学は短期大学として運営されています。香川短期大学は短期大学として運営されています。香川短期大学は短期大学として運営されています。</p> <p>Q3. 香川大学で検定された学部の中で最も検定された学部はどの学部でしょうか。</p> <p>A. 経済学部と法学部 B. 教育学部と理学部 C. 教育学部</p>
---	--

3. 完成に至るまで



2008年

教養ゼミナール「香川大学検定をつくる！」を実施
 →作成過程を通じて、香川大学への理解が深まり、
 愛校心や帰属意識が高まることを期待
 →一定の成果、第三者のためのツールとしては不十分



その成果を叩き台として、プロジェクトを立ち上げ
 →学生支援サークル「MINTs(ミントス)」の学生をリーダーに



3. 完成に至るまで



2008年

教養ゼミナール「香川大学検定をつくる！」を実施
 →作成過程を通じて、香川大学への理解が深まり、
 愛校心や帰属意識が高まることを期待
 →一定の成果、第三者のためのツールとしては不十分



その成果を叩き台として、プロジェクトを立ち上げ
 →学生支援サークル「MINTs(ミントス)」の学生をリーダーに



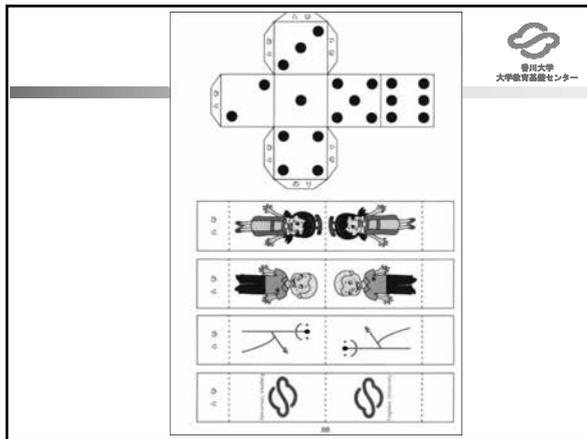
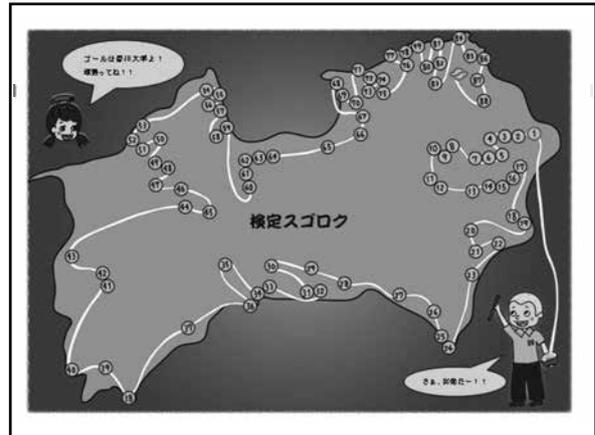
『香川大学検定2009』を刊行

3. 完成に至るまで



・「香川大学検定」の特徴

- ①お遍路さんに見立てた構成
お遍路さんにちなんで、問題数は88問
(『香川大学検定2011』から108問に)



3. 完成に至るまで



・「香川大学検定」の特徴

- ①お遍路さんに見立てた構成
お遍路さんにちなんで、問題数は88問
(『香川大学検定2011』から108問に)
- ②うどんに見立てた構成
セクションは、お椀の巻(基本)、麺の巻(教育活動)、
ダシの巻(歴史)、トッピングの巻(課外活動)、から成る。
(『香川大学検定2011』から食欲の巻(香川県)が加わる)



4. さまざまな展開



2009年
「香川大学検定」受験サイトの開設



問1 教育学部キャンパスの東北の隅には通用門がありますが、それは過去に一度ふさがれたことがあります。それは何故でしょう？

画像はこちら

- A. 学生が飛び出して危ないため
- B. 鬼門にあたる方角にあるため
- C. 不審者の侵入を防ぐため

正解

B 鬼門にあたる方角にあるため

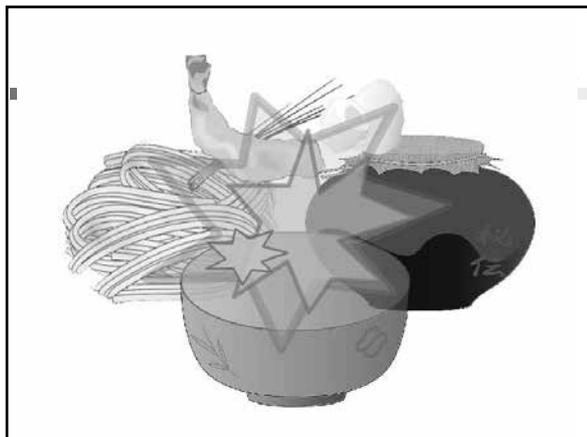
鬼門とは、陰陽道で鬼が出入りするとされる不吉な方角（東北）のことです。1970年代中頃に、不幸な出来事が相次いだ経済学部では、東北の隅にあった門を閉じるようになり、教育学部もそれに合わせて閉じることにしました。当時、教育学部の周囲に設置されていたのは生け垣でしたが、後にコンクリート塀を設置した際、東北の隅に門はありませんでした。現在ある通用門は、学生が塀を乗り越えることが多くなり、地域住民からも批判の声があがったを受け、1990年代中頃に設けられたものです。

次へ

アイテム

きれいなお椀 GET

次へ



めしあがれ

もっとおいしいうどんを目指せ

4. さまざまな展開



2011年

『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を刊行
 →「香川大学検定」のダシの巻(歴史)を独立
 「検定編」の前に、全体の流れを解説する「解説編」を設定



目次

- 第Ⅰ部 解説編
1. すべては明治維新から始まった!
 2. 幸町キャンパスは大正デモクラシーとともに
 3. 破壊されたキャンパス
 4. 香川大学、誕生!
 5. キャンパスで闘う学生
 6. 総合大学化する香川大学
 7. 成長する香川大学
 8. 香川大学にまつわる 知っておきたい有名人
- 第Ⅱ部 検定編

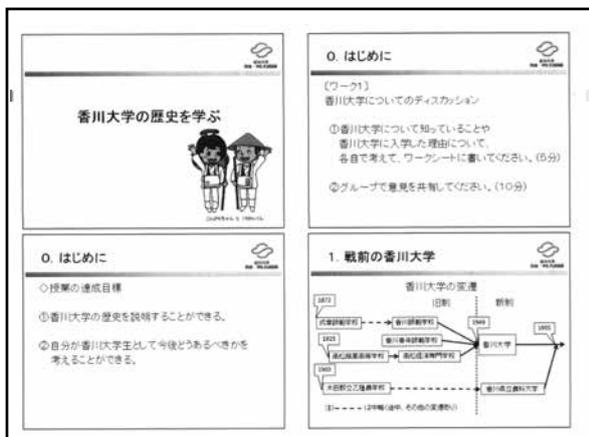
4. さまざまな展開



2011年

『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を刊行
 →「香川大学検定」のダシの巻(歴史)を独立
 「検定編」の前に、全体の流れを解説する「解説編」を設定
 →学生だけでなく、新任教員にも配布

「香川大学検定」を用いた自校教育モデルの開発
 →「社会学特別演習Ⅱ」の受講生(大学院生)と検討
 →実際に授業を行うことがすぐにでもできるよう、授業モデルだけでなく、配布資料やスライド資料についても作成



4. さまざまな展開



2012年

モデルに基づく授業の実践
 →全学共通科目・主題A「人生とキャリア」(必修)
 「香川大学検定外伝」(RPG)の開発
 →次々と現れる敵と、「検定」の問題を解くことで戦う



4. さまざまな展開



2013-2015年

- ・『香川大学検定』は休刊
- ・『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を1年次の学生及び新任教員に配布
- ・モデルに基づく授業の実践
- ・自校教育の重要性を訴え続ける

5. そして必修科目の一部へ



2016年

- 必修科目に自校教育が盛り込まれることが決定
→全学共通科目・主題C「地域理解」基礎科目(e-Learning)
- 第1回 地域の中にある香川大学①
 - 第2回 地域の中にある香川大学②
 - 第3回 地域理解①
 - 第4回 地域理解②
 - 第5回 地域理解③
 - 第6回 地域理解④
 - 第7回 地域理解⑤
 - 第8回 まとめと継続・発展学習への誘い



6. おわりに



- 2007年: 自校教育の必要性について考えさせられる出来事問題はどうか? (→「香川大学検定」)
- 2008年: 教養ゼミナール「香川大学検定をつくる!」を実施その成果を叩き台として、プロジェクトを立ち上げ『香川大学検定2009』を刊行(→『~2012』まで刊行)
- 2009年: 「香川大学検定」受検サイトの開設
- 2011年: 『香川大学検定で学ぶ香川大学の歴史』を刊行「香川大学検定」を用いた自校教育モデルの開発
- 2012年: モデルに基づく授業の実践「香川大学検定外伝」(RPG)の開発(→頓挫)
- 2016年: 必修科目に自校教育が盛り込まれることが決定



建学の精神・理念の具現化にまつわる課題と展望 ～自校教育の可能性への模索：同志社女子大学の事例を通し～

同志社女子大学 宗教部長／生活科学部 教授 小崎 眞

報告概要

高等教育の質保証を推進していく上で、IR (Institutional Research) を活用した教育改善への関心が高まっている状況下で、キリスト教(主義)教育(自校教育)の今日的意義を再検証した。

まず、建学の精神と教育理念を確認した上で、その具現化の実例を紹介した。開学以来、聖書やキリスト教への学びが尊重され、2009年度以降は「キリスト教・同志社関係科目」として、カリキュラムに位置付けられていることを紹介した。とくに、本学でのキリスト教(主義)教育は、たんなる社会的規範の教授ではなく、聖書の学びの方法論に基づく「リベラリズム」の涵養に努めている。学生の授業評価(DWCLA10)においても、「創造力(自由な発想力など)」が養われたとの結果を得ている。次に、日々の礼拝(チャペルアワー)の実践報告を行った。年間300回(1講と2講の間)実施し、一日平均150名の学生及び教職員が参加している。約6500名の在学生数に対して、決して高い参加率ではないが、以下の証言のごとく、学生への教育的意義を確認することはできる。

ふらっと行ったときのお話が、案外自分に必要なお話だったり、自分の探していた答えを見つけるきっかけになるものだったりします。お話を伺うことで視野を広げることができ、静かなチャペルで素敵な時間を過ごす中で自分と向き合うことができます。(本学HPより)

教育効果を含めた教育の質保証を図る上で、数値化したデータ収集は喫緊の課題である。一方で、簡単に数値化(表出化)し得ない事柄への分析も必須と言えよう。いわゆる質的研究の方法論に留まらず、事例(証言)への読み解き(解釈)への挑戦が期待される。「コ・テキスト(テキストの文脈や前後関係)」と「コン・テキスト(状況)」へ関心を払いつつ、教育的意義を探求することが可能となろう。さらに、多様な対話(Discourse)を通してこそ、その意義を多面的に表出し得ると考える。相矛盾する異なる知恵や知識を巡る対話は、想定外の学びを創出する。ゆえに、「弱さ、小ささ」が合理的世界へ抗い、「聖なるもの」として立ち現われてくるといえる。

聖書の世界は「見えないものに目を注ぎます(コリントの信徒への手紙Ⅱ4:18)」と、私たちの判断基準のみを抛り所とする姿勢に対して問いを投じる。数値化の姿勢の中で見落としがちな多様な可能性(人格的出会いなど)を尊重しつつ、具体的な教育活動(正課及び正課外)の意義を見出す叡智を探求する必要があると思われる。「目に見えないもの」への関心は、自身と異なる価値観を生きる他者との忍耐強い対話を尊重する文化の成熟をもたらす。そこに、建学の精神と教育理念の具現化が図られる。

同志社の創立者新島襄は「大学設立の事業は実に国家百年の大計」との言葉を残し、自身の時間軸を越えた視座を提示した。自分の力の及ばない世界から「今」を見つめる事は、まさに、自分自身の身勝手な単一的な価値判断基準からの解放をもたらす。その只中に「異なるもの」との出会いが可能となる新たな世界が創出する。ポスト・モダンの多元化した社会状況にあって、複雑性に耐えるべく智慧を育むことにキリスト教(主義)教育の本質の一端があるといえよう。

第22回FDフォーラム
大学の教育力を発信する

2017年9月6日(日)
箱庭記念会館
(京都府立大学下鴨キャンパス内)

第10分科会
敬業教育としての自校教育～「建学の精神・理念」の具現化にまつわる課題と展望～
自校教育の可能性への模索:同志社女子大学の事例を通し

小崎 真(同志社女子大学)

現在の役割: 宗教部長・生活科学部教授
正課科目担当: キリスト教・同志社関係科目担当
学科科目担当(演習、卒業研究)
正課科目外担当: 宗教部の活動を担う一人として
教職者(教師)として

発表目的: 発表の流れ
I. 問題提起:(創立者からの問い)
II. 「建学の精神・理念」の具現化を巡り:
1. 「建学の精神・理念」の確認
2. 具現化1: 「キリスト教・同志社関係科目/聖書」
3. 具現化2: 宗教部の諸活動「礼拝/チャペル」
III. 課題と展望～評価(成績、アンケート等)を巡り～
1. キリスト教・同志社関係科目に関して
2. 宗教部の諸活動に関して「礼拝/チャペル」
IV. 自校教育再考～教養教育としての可能性を模索しつつ～
1. 教養教育の評価
2. 創立者(新島襄)のキリスト教(主義)教育
3. 対話空間の創出を目指して～教育「協働態」として～

学生・教職員員の輪盤(過去・現在)
敬業部スタッフ
宗教部スタッフ
学生支援部スタッフ
学生スタッフ

II. 建学の精神・理念の具現化を巡り (同志社女子大学の事例)
II-1. 建学の精神と教育理念

○ 学校法人同志社: キリスト教を教育の基本とする (学校法人同志社寄付行為)
○ 同志社女子大学: キリスト教の精神にしたがい (同志社女子大学則(総則))

第1条 本学は、教育基本法に基づき、学校教育法の定める大学として学術の教授研究を行うとともに、キリスト教の精神にしたがい、貞潔な人格を涵養し、国際的視野に立つて建設的に、かつ責任をもって生活し得る女性を育成することを目的とする。

学生一人ひとりが個性と意欲を最大限に発揮し、自ら知識の幅を広げることができよう、多彩で柔軟性のある学びのシステムを設定しています。各分野の基礎をしっかり学び、段階的に専門性を高め、卒業論文・卒業研究へと結実するように設計。所属学部学科の専門科目とともに、多様な分野の共通科目、単位互換制度、各種プログラムを通して幅広い教養と視野を身につけ、広い視野から物事の本質をとらえる力と創造力を養います。

II-2 具現化1:カリキュラム(正課科目)に関して
① 「キリスト教・同志社関係科目」の設置(2009年度～)

教育理念の一つであるキリスト教主義、建学の精神を学ぶ同志社関係の科目

キリスト教の歴史B	キリスト教義理史
キリスト教の歴史C	最初期のキリスト教の歴史
キリスト教文化論A	賛美歌の役割と賛美の精用
キリスト教文化論B	ヨーロッパの文化とキリスト教(あるいは聖書)の結びつき
キリスト教文化論C	死や墓しかなどの人生の問題を通してキリスト教の人間観を学ぶ
キリスト教世界の探求A	キリスト教と音楽
キリスト教世界の探求B	音楽から眺めるとキリスト教
キリスト教世界の探求C	現代世界とキリスト教世界の対比
キリスト教世界の探求D	現代社会の問題をキリスト教的視点で捉える
近代日本と同志社B	学際的な視点から同志社女子教育の歩みをとらえなおす
近代日本と同志社C	新島襄の思想に出会うー先人とその想に接するー
近代日本と同志社D	新島と今の時代
近代日本と同志社E	新島襄の子孫を継ぐ

○ 聖書A・B 春・秋20クラス
必修科目 4単位
(2単位×2科目)
○ 以下から1科目以上
選択必修 2単位
春・秋9クラス
・キリスト教の歴史A～C
・キリスト教文化論A～C
・近代日本と同志社A～D

II-2 具現化1:カリキュラム(正課科目)に関して
② 必修科目としての「聖書A・B」

○ 同志社でのキリスト教教育は、たんなる社会的規範を教える教育ではありません。
○ 本学の「聖書」は、このような同志社の建学の理念と精神を念頭に置きながら、
①聖書と時代史、②風土との関わり、③文化との接点等、
④人間をめぐる諸問題について、
聖書のメッセージがどのように受けとめられてきたか、
⑤それが現代に生きる私たちにどのような意味を持ちうるのか、
といった点に焦点を当てて考察を進めます。
○ 聖書の時代史が語りかけるメッセージを現代の視点から問い直す作業が期待されます。心の問題も含めて、人間や歴史や世界に対する幅広い問題意識をもって授業に臨んでください。
(シラバス<専任担当者により共同作成>より、下線は小崎)

到達度、達成度(シラバスの到達目標<課>2017年度～)

◇学問対象(同志社・聖書)への理解度
◇講義や対話を通じた考察度

(1)現代人にとっての宗教とは何か、宗教の意味とは何かについて考察する。
(2)新島襄と同志社について、同志社の建学の精神について理解する。
(3)「聖書」とはどのような書物か、聖書の時代史と風土や文化など成立の背景について理解する。
(4)新約諸文書の成立の経緯とその内容を理解する。
(5)福音書に描かれた「イエス像」を紹介し、その思想の今日的意味について考察する。

II-3 具現化2 宗教部の活動(正課科目外活動)
チャペルアワー/礼拝(自由参加)

毎朝行われているチャペル・アワーは、本学の精神教育・人格教育の中心となるものです。讃美歌、聖書朗読、奨励(演奏)などで構成されています。京田辺と今出川の両キャンパスにおいて毎日10時35分から約20分間、チャペル・アワー(礼拝)が行われます。どなたでも自由にご参加ください。(本学HPより)

どんな困難な時でも、欠かさず続けられてきた静かな朝の時間は折る者の魂に潤いをもたらしてきた。礼拝は生徒たちの毎日にリズムを刻みながら、神の前に生徒も教師も一人の人間として存在することを教え続けたことだろう。両キャンパスにおいて礼拝は1講時と2講時の間の共通した時間帯…空間を契にしても同一の時間を共有する精神の一体感を得たいとする願いでもある。
(中村操『The Roots 礎の上より』)

礼拝・チャペルアワーの実態

◆礼拝回数 両校地で約300回の礼拝(墓前礼拝(雨天合同礼拝1回)・創立記念礼拝・クリスマス礼拝・卒業礼拝・宗教教育強調週間礼拝を含む)

礼拝の基本要素

- 前奏
- 招き 神による招き
- 讃美 讃美歌
- 神の言葉 聖書・奨励
- 感謝と応答 祈り
- 派遣 それぞれの「生活の場」へ
- 後奏

【2015内訳】		(延べ回数)	
学内教職員	34名	56回	
学外講師	79名	196回	
学生	34名	38回	グループは1名として集計(讃美礼拝など) ※讃美礼拝(司会者と聴衆による讃美)
その他	13名	13回	
合計	160名	303回	5日×1.5週×2校地×2セメスター

Ⅲ 課題と展望～評価を巡り～

1. キリスト教・同志社関係科目

①学習成果としての評価(直接評価)

- シラバスの到達目標
 - ◇学問対象(同志社・聖書)への理解度
 - ◇講義や対話を通じた考察度
 - 担当者間の合意事項
 - 期末試験を実施する(中身は担当者)
 - 講義への関与と期末試験の割合を同程度(50%)
(一方のみでは及第点としない)
- チャペルアワーの感想提出を求める 若干の加点

直接評価	間接評価
学習成果	学習の過程、学習行動、自己認識、満足度等
科目試験、レポート、プロジェクト等	学生調査

山形女子大学における教育保証システムの構築としてのDR
コンテンツプログラム参照http://www.helios.ac.jp/wp-content/uploads/2014/04/1347931_02.pdf 2017. 1. 10

成績評価例 (2015年、開講クラス平均)

- 小峰の場合
 - ◇期末試験 50%程度
 - ◇レポート&講義への関与等 50%程度
(レポート25%+授業コメント等25%)
 - ◇チャペルアワー感想 (+α%:提出者のみ若干加点。減点はない。)
- 聖書 合格率平均 82点
合格率 90%程度

③ 新たな評価基準: DWCLA10とは(2012年～)

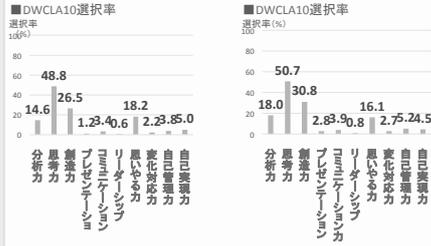
本学の教育理念の1つ、リベラル・アーツ教育では、幅広い学習を通して広い視野を拓く教養教育と深い知識や技能を体系的に身につける専門教育に加え、どの分野の学問を専攻する場合にも、また社会のどの分野に進む場合にも必要とされる、学生としての基礎的・汎用的能力の獲得が重視されます。
これらの能力はディプロマポリシー(学位授与方針)に掲げられており、学生によりよく理解してもらうために、2012年度より、「同志社女子大学の学生に卒業までに身につけてもらいたい10の力」、略して「DWCLA10」として、具体的に表現しています。「DWCLA10」は卒業後の長い人生(キャリア)においてどの分野に進む場合にも共通して必要となるものであり、自立した社会人となるための基礎力となるものです。就職時にも重視される力でもあり、しっかりと身につけてもらいたいと考えています。

同志社女子大学に対する大学評価(認証評価)結果 2014

1 教育内容・方法・成果

学位授与方針に掲げた学習成果を、貴大学の英語名にちなんで「DWCLA10」として分かりやすく示し、「卒業までに身につけてもらいたい10の力」を明確にするとともに各科目と「DWCLA10」との関係を明確にし、教育課程として学生が認識しやすいように工夫している。これにより、学位授与方針に対する理解が十分に定着し、学生が専門知識に加え基礎的・汎用的能力の重要性を認識し、よりいっそう主体的に学習を進めることにつながっていることから、評価できる。

キリスト教・同志社関係科目 2015年春・秋 学生アンケート結果



教員の意向(シラバス): 分析力、思考力、思いやる力、変化対応力

思考力

自ら考える力
論理的に思考する能力

創造力

既存の概念に束縛されない自由な発想力
既存のものを組み合わせる新たな価値を生み出す力

思いやる力

違いを尊重する能力(個人レベル、社会・文化レベル)
相手の気持ちになって行動する力

分析力

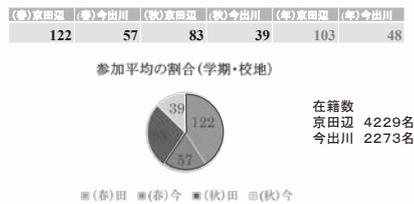
情報を収集し分析する力
現状を分析し目的や課題を明らかにする力
自分自身の人や物事との関係性を理解する能力

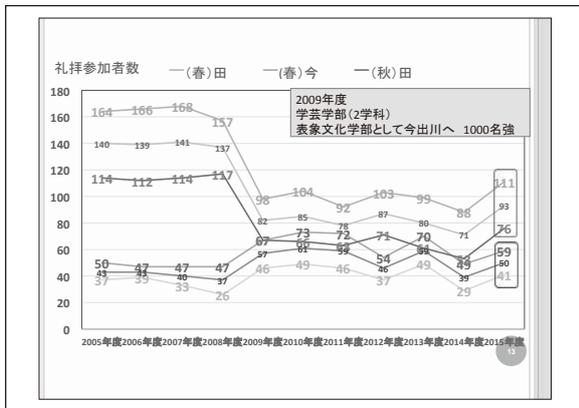
読みづらいと感じるところ、深くところこそ、「新しい自己の了解」の可能性が眠っている。
★真実なものを尊重し、その「心」を掴む
⇒ 自己理解の再考
★当事者の労苦と経験に内潜する
⇒ 自分の生活だけでなく、書き手の生活の中でも読む
★問答を求めない。
難解さ、意味不明さ、読み辛さ
⇒ 私たちの平素の日常で忘れていたものを目の前に差し出す。
(大貫隆『聖書の読み方』岩波書店 2010年 122-182頁。参照)

Ⅲ-2 課題と展望～評価を巡り～

①客観資料: 礼拝

◆礼拝出席者(過去11年間: 2005～2015) 一日あたりの平均人数
(墓前礼拝、創立記念礼拝、クリスマス礼拝、卒業礼拝を除く)





Ⅲ-2 課題と展望～評価を巡り～

② 間接資料： 建学の理念(在学生アンケート)

★本学の建学の理念(キリスト教主義/国際主義/リベラルアーツ)の内容について、どの程度知っていますか。

(知っている、少し知っている、あまり知らない、知らない、無回答)

⇒ 2015年度の認知度 62.2%
認知度の高い学年 4年 68.3%

★「知っている」「少し知っている」にマークした人は日頃の学生生活の中で本学の建学の理念をどの程度実感しますか。

(実感する、やや実感する、どちらでもない、あまり実感しない、実感しない、無回答)

⇒ 2015年度の実感度 49.4%
認知度の高い学年 4年 54.9%

Ⅲ-2 課題と展望～評価を巡り～

② 間接資料： 報告資料(集)など

「宗教部案内」 3,200部
(新生を中心に4月配布)

Chapel vol.21 4,500部 3月末刊行
(卒業生・新生を中心に配布)

「同志社女子大学ワークキャンプ報告集(第23回)」
850部 3月末刊行

「Chapel News」
No. 265-272
(1年生・各事務室・教職員に毎月配布)

Ⅳ. 自校教育再考：～教養教育としての可能性を模索しつつ～

近代は、客観性、実証性、合理性を重んじる啓蒙主義の時代である。ここから合理性が不当な利用をされることによって、自分が敬するように世界を理解するという態度が醸成。
(佐藤新治「近代とは何か」祥伝社 2015 参照)

自分が敬するように ⇒ 自校が敬するように / 宗教部が敬するように... 教職員が敬するように

教育の私物化

↓ 私の領域： 私のミニ専制君主化
私の領域外： 無節操、無原則、無責任

自分自身に縛られた矮小化した世界観

- × 自己の不都合への対応
- × 他者と対等な調和した関係

あらゆるものを自分の固定化したイメージの中へ閉じ込め、閉じ込められ、自らの祝儀的束縛の中へ自身を位置づける。

現実の世界の消滅 閉塞感

Ⅳ. 自校教育再考～教養教育としての可能性を模索しつつ～

1. 教養教育の評価とは：理念・精神の評価基準とは？

定量的？ 定性的？

学生の声(聖書の授業について) (本学HPより)

聖書には、旧約聖書・新約聖書一貫して「弱さこそ聖なるもの」という理解があると教わりました。私は、「弱さ」を出すことの大切さを学び、嫌なことがあった時も「誰かに嫌なことがあった時、わかってあげられるんだ」「この嫌なことにも、ちゃんと意味があると考えられるようになりました。今では、『弱さこそ聖なるもの』という理解に共鳴し...」

学生の声(礼拝に関して) (本学HPより)

ふらっと行ったときのお話が、素外自分に必要なお話だったり、自分の探していた答えを見つけるきっかけになるものだったりします。

学び手の主体性を尊重(侵害しない)
数値化し得ない意義(合理性が必ずしも基準にならない)

Cf. コ・テキスト(テキストの文脈や前後関係)とコン・テキスト(状況)への注目
意味はコンテキストから生じ、決まる
⇒ 私たちが今、そのテキストや言葉をどこに関連させて、つまりどのような文脈において意味を探っているか。

(脚本員也「比喩としての旧約テキスト」『基督教研究』第43巻1号 1980 pp.1 - 42)

Ⅳ-2. 創立者(新島襄)のキリスト教(主義)教育(遺言を通し)

新島襄の遺言(口述筆記)から... 1890年1月21日 <一部抜粋>

同志社は既に八十年不慮なる学生ヲ卒業せしむるためて其の本性一徹之ヲ順守す可き事以て天下の人物ヲ養成す可き事

同志社教育の目的は其の宗学政治文学科学等に從事する二種の才力あり(補)一は誠の自由ヲ愛し一は以て邦家一尽す可き人物を養成するを務む可き事

同志社の教育(キリスト教主義)への期待
⇒ いわゆる合理的思考に基づく教育への疑義

IV-2. 創立者(新島襄)のキリスト教(主義)教育(遺言を通し)
①「真正の教育」・・・(1882)

新島がこだわる「真正」・・・ 遺言(1890)
同志社教育の目的は、神学、政治、文学、自然科学などいずれの分野に従事するにせよ、どれもはつらつたる精神力があって「真正の自由を愛し、」それによって國家につくることができる人物の養成に努めること。
(括弧内の言葉は別に付記されている。「同志社への遺言」(1890) 『新島襄 その時代と生涯』同志社 1994、現代語訳「現代語でよむ新島襄」丸善2000)

同志社教育の目的は、神学、政治、文学、自然科学などいずれの分野に従事するにせよ、どれもはつらつたる精神力があって、それによって國家につくることができる人物の養成に努めること。
「真正の自由を愛する事」を前提とし、國家に尽くすこと。
國家 < 真正の自由 cf. 1890年 教育ニ關スル勸諭

「愛する対象／関心対象(目標)が変わると大切なものが変わる」

IV-2. 創立者(新島襄)のキリスト教(主義)教育
② 偶儀不羈なる書生(常規では律しがたい学生)を圧迫しない
眞實な存在への関心・・・(「理念・精神」の言葉化)

同志社の創立者の一人新島襄は聖書の語りだす精神世界(愛)に触れ、自分自身が問われ、新しき歩みへと呼び出されました。ゆえに、同志社を退学させられた数名の学生たちに頤いを寄せて、「一人一人は大切なり」と語りました。それは、単に小さきや稀有さへの注目ではなく、排除された眞實な存在への関心でありました。自分にとっての「眞實な他者」との出会いこそが、自分自身の絶対的な正しさからの解放をもたらすことを確信していたからに違ひありません。そこに新島の求めた自由(リベラル)な世界が立ち現れます。
(宗教部長 小崎 眞【宗教部案内】より一部抜粋)

神を外して・・・
わたしにとって、「神をつくって見たり、見られたりしていることより、わたしはわたしである」というプロセスの中で「いのち」に出会ってこれらとすることほど、難しいものはありません。人との直接的な出会いよりも福祉専門家としての眞性にしがみつき、いわば福祉の体系化という美名のもとに、思考のパターンや役割を一定させて自分に神をつくって敬拝する。こうした自分のあり方が問われます。学生たちの、より大きな枠組みの中で相手への関心、素直で柔軟なあり方は、わたしにとって、目録もあり、羨ましくもあります。
(宮本義徳「私なりに思うこと」『ワークキャンプ報告集』より一部引用)

IV-2. 創立者(新島襄)のキリスト教(主義)教育
③ 機械的二流への恐れあり これを戒める

いわゆる合理性に基づく教育への危機感:
合理的判断に従い、有用性や効率性を求め「機械的にものごとく処理すること」は、目の前の対象を「物化」する姿勢へと。
新島は生命を「物」として見つめてしまう私たち人間の傲慢さを見抜いていたのかも。

わたしたちに於いて、何かの資格取得のための実習や、大学での単位を獲得するためにこのプログラムに参加したわけではありません。ここでは、役立つことを期待されたり、また役に立とうとする思い込みを注意深く警戒してきました。「～のために」という発想をしなかつた分、誤解や思い込み、善悪の衝突、様々な迷惑をおぼけたことを悔いなければならなかつたかもしれません。しかし、それだからこそ、立ち止まり、悩み、助け合いながら、一瞬にも似た量かな出会いもまた経験することができたのではないのでしょうか。

イエスは香油の無恥を非難されませんでした。いわば「聖なる浪費」としてこの無恥の可能的な世界を見つめておられるのです。「すべてを思い果たす」ことの中に、出会いの本質が開かれているのかもしれない。

(中村宣博「聖なる浪費」—はじめの言葉にかえて—
『同志社女子大学ワークキャンプ報告集 1995年』より)

IV-3 対話の創出を目指して ～「真理の複数性」へ披かれて～

- 神学がなぜ役に立つのかという、目に見える世界だけでなく、目に見えない世界を含んでいるからです。理屈を徹底的に突き詰めても判断できない状態で、後進しない判断を与えてくれる「何か」を持っている。
- 絶対に正しいことは複数あるのです。だから、他人の気持ちになつて考えることで、人間はお互いをゆるしあえる寛容の精神が生まれます。

(心のページ：神学から得られるもの 佐藤健さんに聞く) (毎日新聞 2011年3月28日 大阪朝刊)

神学
一神教の文化:
自分の感覚で見聞きし、捉えている世界の外側には「何か」がある。その「何か」が無ければ、世界は完全ではない。見えなからこそ完全であり、究極である。それがこの世界を造つたのだ。例：数学の0(ゼロ)。ゼロは存在しない。存在しない何かによって、数学が完全になる。その裏返しに「無限」、「ゼロ」と「無限」を発見することで数学という完結。
(大塚真幸、朝川大三郎、高橋新一、大賀剛「やっぴりよびなキリスト教」2012 参照)

IV-3 対話の創出を目指して
～真理の複数性・多様な評価を求めて～

教育はそのエゴイズムを「相対化」し、くり返し検証するものでなければならぬ。ここでキリスト教の問題を考えると、自己相対化が重要なテーマとして浮上する。

自己相対化を巡る言説：米国の神学者・リチャード・ニーバー(20世紀の前半から半ばに活動)
自己中心性からの解放 ⇒ 「自己相対化」 ⇒ 「絶対的なもの」を前提
「神学的・神中心的相対主義」

第一 すべての相対化。結局、よりどころはない。ニヒリズム、虚無化

第二 とりあえず何かを基準とする事で相対化を図る。
「何か」を求めるときに本来、相対的なものを絶対視する傾向
脚匠であったり、愚師であったり、最終的には自分自身であったり。

第三 高次なるもの(神) 超越性 絶対性 をもって、自身を相対化
⇒ 自由と平等による基本価値 (ハインリッヒ・ゲオルク: 1928-2014)
眞正の自由 (新島襄: 1843-1890)

(飯塚「リベラルアーツとキリスト教」『教育教育は進化する』神戸学院大学文学部総合文化史料科 冬号会 2005)

IV-3 対話の創出を目指して ～同調から差異へ

「共感し得ないことへの痛切な実感」を懐き、忍耐強く問い続け、対話し続ける時、新しい関わりが創出する。
「物語化への可能性を呑んだ物語」
(飯谷新一、大塚真幸、上野千鶴子、窪田清一、窪田まよ子「ひびりて歌しまないための『痛みの哲学』』青土社2013年)

語りえないことへの関心 「問いは人を結びつける」(エリク・ヴィーゼル)

↓
Discourse(ディスコース)「言説」「談話」の可能性
討論会、座談会、フォーラム、シンポジウムのような場での発言、発語、記録
「同じ方向を向かず、あちこちコースを外れて走るdis + curro=走る」
⇒ 多様な、相矛盾するものを含めた知恵や知識を探り、討論し合う。
(野本真也 主題講演「イエスにならつて」キリスト教学校教育同盟関西地区大学部会2011年9月 参照)

この対話の中で、建学の精神・理念の「具現化」を!

学生の語りから
授業の都合等でなかなか毎日に行けませんが、途中からでもふらっと立ち寄れる礼拝なので行けるよ、行きたい時に気軽に行っています。ふらっと行ったときのお話が、案外自分に必要なお話だったり、自分の探していた答えを見つけるきっかけになるものだったりします。

今では、『弱さこそ強なるもの』という理解に共鳴し、自分のダメなところや自信の無いところといった「弱さを見つければ、自分としっかり向き合うことが出来た」と感じたり、少しずつではありますが、ありのままの弱い自分を素直に受け入れることが出来るようになってきました。

空気感の違い...
キリスト教の時間軸は、今のこの時代の時間軸と違う。ここがキリスト教の特長点であり、非常に大切に感じている。特長点があることは、マジョリティーではないということ。もっと長くて、もっと深いものなのだと思う。世の中がどう変わると、普遍的な信仰がある。学校に動いてきたとき、学校内、特にチャペルの中と外では、何か空気感さえ違うのを感じていた。(内田樹)

前橋教会 創立130周年記念講演会対談 内田 樹 & 萩 徹宗『ハタから見たキリスト教』より
<http://www.christiantoday.co.jp/articles/22358/20161021/uchide-tatsuru-syaku-teeshu-1.htm> 2017. 1. 31

1パーセントの意味
1パーセントしかないと思うけど、1パーセントしかないことの意味があるのだということを感じ、あらためて感じた。キリスト教会は、聖人君子の集まりではない。みんな下手なりに、泳ぎながら生きている人たちの集団。どうか、皆さんも自分の物語を持って、泳いでいけるようになりますように(川上肇)

前橋教会 創立130周年記念講演会対談 内田 樹 & 萩 徹宗『ハタから見たキリスト教』より
<http://www.christiantoday.co.jp/articles/22358/20161021/uchide-tatsuru-syaku-teeshu-1.htm> 2017. 1. 31

***再履修の学生(少数者)からの問い**

再履修の理由	5	2	1
再履修の理由	46	35	0
再履修の理由	21	5.3	2.1
再履修の理由	7.3	6.4	3.9
再履修の理由	26.6	7.1	2.8
再履修の理由	高い	やや高い	低い
再履修の理由	7.5	1.0	0.5

***学期の最終週でも礼拝に参加する学生**
***礼拝に参加していない学生**
***礼拝に初めて参加した4年次学生**
***教会の良縁に(くい)学生への関心**

参考... **春学期末(最終週)** 2016年度 田29・今24
秋学期末(最終週) 田23・今14

★真正の教育評価?
★評価不遜なる学生を圧迫しない教育評価?
★機械的に流れない教育評価?

見えにくいものへの関心
小ささ、弱さ への 関心
いわゆる合理性への抗い

人は強さや大きさを絆にする時、すぐさま効率を最優先させ、排除の論理を振りかざし始めます。しかし、弱さを絆にしていれば、弱さには不思議な力があることに気づかされます。誰をも排除せず、お互いの賜物を活かして、和らぎ合う、心地よい場所を作りだせるからです。ここに生きていてもいいんだ、そして、「お互いさま」の中で許しあい、補い合って作る安心と信頼。肩の荷がおりませんか。

(荒井英子・荒井萩『弱さを絆に』教文館 2011年p. 48)

とりあえずのまとめとして...

新島襄が目指したキリスト教(主義)教育の実践は参加型/変容の様式/課題提起型の教育⁽¹⁾であったといえよう。この教育では、自閉的な自己同一性を強化する記述言語(情報伝達)ではなく、相手への語り(パロール)が尊重される。「語りパロール」は話し手や聴き手の意図を越えて働き⁽²⁾、教授者と被教授者の固定的な関係を打破する。

知は私有化できるものではなく、対話の中に創出されるとの真理が顕わになる。「戸毎に談き人毎に論ず⁽³⁾」と柏木謙四が評することく、新島はこの対話を尊重した。対話は同化を前提としないため、同化し得ない対象が排除されない。ゆえに新島は「我母校を以て深山大沢之如くになし、小魚も生育せしめ、大魚も自在二発育せしめ⁽⁴⁾」と語り、各人の多様な可能性を尊重すると共に自己の単一的な価値判断基準から解放されていた。

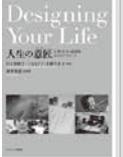
よって、新島は自身と異なる主義主張の人々をも切り捨ててはなかった。このような関係性を育むことにキリスト教(主義)教育の本質の一端があり、新島はこれを「自由教育」として自分の「畢生の目的」とし、「開発主義教育」を実践したのであった⁽⁵⁾。

(拙著『キリスト教(主義)教育への一視座-新島襄の「良心」理解を中心として』キリスト教教育論集21号 15-28 2012より加筆修正して抜粋)

創立者の教育理念(自校教育の理念・精神)との対話を通し
学際的研究への挑戦 学生の問題を共有した教材開発へ
研究・教育 協働態として

Cf. 「協働態」を官本は「共同体」、共時的共、自同の同、裏体の体から成り、閉ざされた反歴史的な自己同一性を表す表現であるのに抗して、協力の協、働(エネルギー)の働、流動態の態から成る新造語⁽¹⁾で定義する。

(宮本久雄『旅人の脱在論-自・他相生思想と物語り展開』創文社、2011年参照)



V 今後に向け...教育の「協働態」を目指して
~創立者との対話から~

実質的自校教育を越えて
謙さに日く、一年の謀こと八穀を植ゆるに在り、十年の謀こと八木を植ゆるに在り、百年の謀こと八人を植ゆるに在り、蓋し我が大学設立の如きハ、実に一國百年の大計よりして止む可からざる事業なり

『同志社大学設立の旨意』(1888[明治21]年11月)『新島全集』第1巻 140頁。
一説には勝海舟との対談から200年を要するとの指摘もある。尚、この『旨意』は徳富猪一郎との合作。

新島は「100年」という「時間の長さ」の必要性だけを語ったのではなく、「自らの時間観を越えし視座」から事柄を見つめる意義を提示しているように思います。今から100年後の時は2117年となります。たぶん、私たちがこの世に存在しないでしょう。しかし、自分が存在しない時、自分の力の及ばない世界から「今」を見つめる事は、まさに、自分自身の身勝手な思いからの解放をもたらします。自らの思いのみに支配された「今」、自らの計画の上に位置づけられた「一日」とは異なった「時」が迫ってきます。

(拙著 巻頭言:『Chapter 1』2016年度より 一部抜粋)